

平成 29 年度大阪府依存症関連機関連携会議第 1 回依存症地域生活支援部会
【議事概要】

依存症関連機関・団体紹介冊子作成について

(1)対象と目的、内容に関する意見

- ・女性支援に関わっている人がアルコールや薬物、ギャンブルで困っている人、虐待、DVを受けている人などのために活用できる冊子づくりができればいい。
- ・依存症は病気であることがわかりにくい。病気であることがわかって腑に落ちる。医療モデルと社会モデルがあるが、社会の障壁、差別をなくしていくのが社会モデル。医療だけでは無理、と言わないといけない。医療モデルと社会モデルが協力していくことが必要。回復への支援や権利はある、ということが伝わる冊子であればと思う。
- ・この冊子はどのような場面で使うかによって、内容も変わる。まずは病気を知ってもらい、それを支援のきっかけとして使うものなら広く浅く紹介するということがいいと思う。
- ・支援者に配るのであれば、いろんな機関がわかるとか、こんなところにつなげたらいいということがわかるような資料にしてもらいたい。多過ぎる情報では迷ってしまう。
- ・役所や公民館などに置いてもいいのでは。支援につながりやすくなるための冊子と聞いていたので、あまり内容を深めるとそういう冊子にはならないと思う。
- ・薬物の人で、裁判を控えていて保釈で出てくる人がいたり、家族でもうすぐ刑務所から本人が出てくるという人もいる。パートナーから暴力を受けている人もおり、そういうところも少し載せることができればと思った。
- ・知らなければどうしようもない。専門書である必要はない。過去の自分を振り返ってみると、広く浅く、まずは知る、ということが大事だと思う。そのあとに深くつながっていくことはできる。一石を投じる、苦しんでいる人が支援につながる、そういうものになってほしい。
- ・まず、誰に向けて作るものなのか。紹介だけで分厚くなってしまっても困るし、小冊子では収まらなくなる。内容が増えると収集がつかなくなるのでは。
- ・この冊子は支援者が使うものと理解している。まずは知っていただくことが大事。
- ・知らないと何もできない。私がギャマノンにつながったのは、パソコンからだった。その時は、保健所に相談したり、市にパンフレットがあることも知らなかった。一步踏み出すのはすごくしんどいこと。深い内容より、どこに相談すればよいか分かるものがよい。自分の差し出した手をつかんでくれる人がいるんじゃないかと思ったり、こういうところがあるということがわかると心強いと思った。
- ・家族として、回復施設、自助グループがどういうものなのかを知りたい。セーフティネットとしてすべての情報があるのではなく、どういうところがあるのかわかるだけでも家族には力になる。
- ・みんなに、こんなこと困っていませんか、ということ投げかけてくれたらと思う。回復した人の声もあるが、回復しながら、つまづきながらでもやっている人がいることも表現できたら。
- ・今、困っている人の支援を一番に考えてほしい。本人は自分でおかしいと気づく人もいるが、まわりの人や、家族などが支援を求めているケースが多い。手に取って知識を得てほしいので、あまり分厚いと手に取って読む気がわからないのでは。
- ・簡単なことだが、病気である、回復できる、仲間とつながっていけるという知識が、市や保健所でもなかなか浸透していない。依存症の人は病気という知識もなく、人間的にだらしないと思われる。こういうのがあったな、というのが頭の隅に残っているのが大事だと思う。苦しんでいる人の相談支援の一端になり、まず知識があり、相談できることがわかるものであってほしい。
- ・一番大きな問題として、専門職を含めて、支援者側の理解が進んでいないことがある。依存症について社会的にこれまで議論がなかった。知らないから偏見がある。社会や関係する人に理解してもらって、支援してもらうことがベースとして必要。

(2)冊子の体裁に関する意見

- ・3つの依存症をひとまとめにするのはよくない。別々でないと難しい。
- ・それぞれみんなの意見をくみ上げて、ポイントのある冊子にしてほしい。
- ・依存の対象ごとのリーフレットも必要だが、今回冊子を作ってみて、のちのち依存症別のものがあればよいのでは。一緒に掲載されていると、仲間なんだなと感じてもらえるのでは。
- ・依存は一つではなく、アルコールの人がギャンブルに変わっていくこともある。

(3)その他の意見

- ・目次に、断酒会はあるが、断酒会家族会がないので入れた方がいい。
- ・情報は古くなるので、ホームページのリンクがあるのはいいこと。
- ・紹介する団体が、これでいいかどうかはチェックするのか。これだけでいいのだろうか。